

気仙沼大島漁業史文庫プロジェクト

被災資料の救出と 「大島漁業史文庫」建設の経過報告

田上 繁

2011年3月11日の東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県気仙沼市大島において、長年の漁業史関係資料を通してのご縁により、所員・職員や歴史民俗資料学研究院生などが中心となって「大島漁業協同組合資料」約5,000点の救出活動を行った。塩水やカビによる腐蝕を防ぐために応急措置が施されたダンボール約300箱分の資料は、奈良県の奈良文化財研究所において大型真空凍結乾燥機により乾燥処理がなされ、2012年11月には大島へ無事返還された。

東日本大震災に関連しては、財団法人日本常民文化研究所時代に借用したままになっていた古文書で、震災以前に返却を終えていた気仙沼・唐桑近在の諸家文書の多くがやはり災難に遭っている。舞根の横峯（畠山孝則）家文書はすべて津波に流され、小々汐の尾形忠行家文書は、その大部分が消失してしまった。尾形家文書については、後日、800点余のうち200点余が泥水の中から発見されている。両家文書については、借用中に写真撮影したフィルムが研究所に保管されているので、被災された所蔵者からのご希望によりそれぞれ複製を製本して両家に届けた。



写真1 被災した多数の漁業組合関係資料（2011年5月）



写真2 大島開発総合センターでの資料クリーニング作業（2014年6月）



写真3 資料に付着した泥や砂を取り除く作業（2014年6月）



写真4 資料のドライクリーニングとファイリング作業（2014年11月）

2014 年度の活動

気仙沼市大島の漁業協同組合資料については、2011年の震災以来、その救出作業をボランティア活動の一環として大島や奈良文化財研究所で続けてきたが、2014年度は、6月19日～23日と11月7日～10日の日程で大島において2回実施した。いずれも、文書担当の所員・職員と歴史民俗資料学研究科院生、及び学部ゼミ生、学芸員課程履修者（博物館実習Ⅰ）などが参加した。その2度にわたる参加人数は合計で68名を数える。

作業内容は、真空凍結乾燥を施された資料の汚泥除去作業（クリーニング）や紙同士が付着した資料の剝離作業が中心となった。今後、「大島漁協文庫」の建設が建設班によって進められているので、収蔵庫での開架に向けた全資料の最終的な目録チェック、ファイリングなどの準備作業を進める必要がある。また、研究所では2014年度より大島を含む周辺地域を調査地とした共同研究「海域・海村の景観史に関する総合的研究」に着手しており、次年度開催予定のシンポジウムとともに、大島は新たな研究の拠点として重要性を帯びてくる。

大島漁協文庫建設班 2014 年度の活動

重村 力

文庫建設に向けた2014年度の活動を以下に記す。文庫の建設敷地については、これまで浅根の漁協出張所敷地や、大島開発総合センター敷地内など、予定地が転々としてきたが、2013年度末に、新しいわかめ集荷場が大島大向の土地に建てられることが決まると、大向の地主小野寺義久氏が隣接する敷地117m²を、借地として提供してくださるとの申し出をえて、計画は大いに前進した。2014年6月までに工学部重村・三笠研究室で計画を修正し、3月に会合を行い、大島漁協文庫の会を設立し、大島および気仙沼の関係者に常民研有志が加わり、文庫の建設および管理主体を明確にした。敷地は所有関係の調整を行うとともに6月に農地転用を申請し、9月に許可が出た。9月からは、大学側と建設業者の工事の提携関係や、契約形態を考えて、協力業者を探し、櫻田務棟梁を中心に協力してもらうことを決めた。またこの件に加え、隣接する漁協集荷施設との計画調整を行い、来春の着工をめざして、最終実施設計案を調整した。



写真5 大島での棟梁との打ち合わせ（2014年3月）

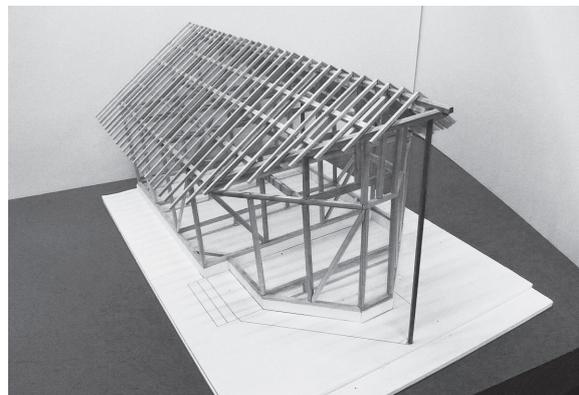


写真6 木構造の検討 重村・三笠研究室（2014年2月）